

ホームヘルプ事業の黎明としての原崎秀司の欧米社会福祉視察研修

- 問題関心の所在と視察行程の検証を中心に -

帝京平成大学 中嶋 洋 (005048)

キーワード：ホームヘルプ事業、原崎秀司、欧米社会福祉視察研修

1. 研究目的

日本のホームヘルプ事業の黎明に関し、同事業を諸外国から導入したキーパーソンとして原崎が取り上げられることはあっても[池川清(1971:39)、竹内吉正(1974:59;1991:16)、森幹郎(1974:3)、上村富江(1997:247-57)、山田知子(2005:196)など]、その詳細な過程・経緯や、視察研修に臨んだ原崎の思想的背景や内面までは明かされていない。例えば、当時の原崎がいかなる問題意識をもちながらどのような視察行程を消化していったのか、また様々な視察研修体験のなかから彼は何故ホームヘルプの事業化を志向したのか、さらに、将来の日本社会や日本人の生活様式として、彼はどのような理想像を思い描いていたのかなどについて不鮮明なままとなっている。

原崎秀司(1903.8-1967.5、以下、原崎)は、戦後日本の社会福祉に貢献した人物のなかでもとりわけ、ホームヘルプ事業の重要性を認識し、その啓蒙に尽力した人物とされる。原崎は、1949(昭和24)年3月から1956(昭和31)年3月までの7年間、長野県社会部厚生課長を勤め、同課長就任時の約7か月間に国際連合社会福祉奨学生として、欧米社会福祉視察研修に専念したことがわが国の在宅福祉分野の実践を進めることに寄与することになった。彼は、進んだ諸外国の社会福祉実践やホームヘルプ制度を見聞し、その合理性や先進性に驚嘆したという。そして、帰国後、約2年間の熟慮検討を重ね、「家庭養護婦派遣要綱」を作成の上、1956(昭和31)年4月9日、長野県告示「家庭養護婦の派遣事業について」(31厚第235号)を通知し、日本最初のホームヘルプ事業の創設に大きく貢献した。

上記のような問題意識の下、本発表では、戦後日本にホームヘルプ事業をもたらした先駆的人物として原崎を位置づけ、その導入経緯を彼の思想及び取り組みの視点から明確にすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

戦後日本のホームヘルプ事業史の出発点となった実践を牽引した原崎の思想展開を明確にしなければ、その黎明期の形成過程を掘り下げることはできまい。その際の分析視角として、学生時代、視察研修時、厚生課長退任後などに分けて検討する必要があると思われるが、本発表ではまず、彼がもっとも資質を発揮したと考えられる視察研修時の思想や取り組みに焦点をあてることとした。

研究方法は、視察当時の手記『歌稿 第一輯』(1953年9月19日-1954年5月1日、以下、日誌)の記述及び先行研究で分析されていない機関誌『信州自治』(信州自治研究会、1950-1956年)に掲載された彼の論稿など可能な限り第一次資料に依拠するものとする。研究課題は、視察研修以前の原崎における問題意識の所在の探究、原崎が行った視察研修の過程の解明、視察研修終了前後の原崎における思想展開の考察の3点である。これらの3つの課題を解くことによって、飛躍的な生活改善が望まれた1950年代前半の長野県という地域社会で萌芽したホームヘルプ事業の先駆的実践の端緒について明らかにしたい。

3. 倫理的配慮

日誌は、原崎の実子(長男)の原崎修一氏から、2009(平成21)年8月3日に入手した。倫理的配慮として、研究の範囲内での史料活用を確約することで使用許可を得た。また同氏への聞き取り調査は、2009(平成21)年1月3日~2010(平成22)年3月14日に延5回行い、原崎を巡る背景事情や私的事項をご教授いただいた。明山・野川(1973:101)や山田(2005:196)らが指摘した、1954(昭和29)年における原崎のイギリス視察は、日誌の記述から正しくは1953(昭和28)年10月-1954(昭和29)年4月であったようである。

4. 研究結果

視察研修の過程を辿るなか、原崎は食糧不足、生活保護など日常生活上の基本的課題への危機意識や、県下で展開されていた新生活運動などの影響を受けていたことが考えられた。原崎は、欧米社会福祉視察研修を通じて、欧米で社会福祉サービスが進んだ背景に、堅実な生活や生き方の哲学を追究することで、物質的にも精神的にも自立可能な人間像を構想していた。すなわち、日常生活や福祉実践のなかにイーストエンドの貧民窟などで感じた合理性やスイスの高等工業学校で触れた科学性の概念の発見があることを見抜いた原崎は、これを日本にもたらそうと「創造的進化の社会」を想見した。そして、生活や制度を自ら苦悩しながら創造する欧米諸国の実学精神に深く共感した原崎は、遅れていた日本の実状を憂慮しつつ、その実験的試みとして家庭養護婦派遣事業を創設したと考えられた。そこには、先進的な欧米諸国に感化された原崎自身による地域振興を旨とした創意工夫や、地域社会の形成主体としての人々の自覚向上による、社会福祉への理解の深まりが見られた。

今回、原崎の欧米社会福祉視察体験を日誌の記述から辿り直すと、人の生き方や生活様式モデルをスイスから、社会福祉施策や主体的学習の展開のヒントをイギリスから摂取しようとした形跡が見られ、それは、昭和20年代後半当時、日本社会の大きな変革の必要性を認識していた原崎による社会福祉実践の地域社会への導入の一つの試みであった。